

宮崎うの

Uno Miyazaki



〜孕むまで注がれて…♡〜

絶倫鬼の生贄妻

1

宮崎うの

Uno Miyazaki

絶倫鬼の生贄妻

〜孕むまで注がれて…♡〜

第一話

「女の悦びを教えてやる」



吾^{われ}をこんなに
執心させられるのは
お主^{おま}だけだ

ずっと

お主^{おま}を手に入れるのを
待ち望んでいた――

吾^{われ}とひとつになれ

小夜^{さよ}

夢…?

金色の瞳に角^{つの}…

はっ

フ

まるで……

カチカチ

すまん……
また借金が
増えてしまった……

そうですか……
ですが父上……

他人の馬を
厠の間
預かった間に

馬が暴れて
塩川様のお屋敷を
荒らした
からといって

その修繕費を
父上が工面する
必要はないのでは？

道理がとおる
相手じゃ
ないんだ……

命があるだけ
ありがたい

それでな
小夜……

俺は
死ぬまで大山の
採銀所で
住み込みだ……

この家も
取られてしまう

おまえには
塩川様のお屋敷に
奉公に出てほしい

私の先祖は
名高い武人の
従者だったという

しかし
伝説の金色の瞳をした
大山の鬼を討ったあと

その子孫にはなぜか
次々と不幸が降りかかり
家は没落していった

私たち親子も
その例にもれず

旦那様
新しい奉公人が
参りました

坂田小夜と
申します

父が無礼を働き
申し訳ございません

明日よりこちらで
お役に立てるように――



口上はいい

よく顔を見せろ

随分
おぼこい顔を
しているな？
楽しめそうだ

おやめください！





……っ
生意気な小娘め！



あなたに
汚される
くらいなら

切り捨てられる
ほうがましよ！！



…見事だ娘



アッ



体が
動かない…!?

なんだ
貴様…ッ!?

誰?
見たことない
肌の色

異国の…人?

主人
この奉公人
吾^{われ}がいただこう



まさか

あ…あれは…
鬼だ…

き…
消えた…?



でもこの金色の瞳—

大山の鬼が出たぞ！



場所が変わった…？

西洋風の
お屋敷…

こんな場所
村にはない

あなた…
鬼なの？



ああそのとおりだ

待て待て
吾は命の
恩人だぞ？

少し
話をしよう

確かに吾はお主の先祖に討たれた鬼だ

だがからがら命はとりとめた

以来この人里離れた地でひっそり暮らしておる

私を助けた目的はなんですか

瀕死の状態から回復するために力を使い過ぎてしまっただけ

今の吾にはたいした力は残っておらん

そこで――

吾はお主が欲しいのだ

お主は高い霊力を持って生まれてきておる

吾のものにしたい

この鬼、恐ろしいけど

艶のある声、整った貌

不思議な魅力に
惑わされそうになる

それは…
私を食べると
いうことですか

まあそういう
ことになるか

勿論
タダとはいわん

父親が採銀所に
いるらしいな

あそこは
年に何人も
死者が出ておる

何を…仰り
たいんですか

吾^{われ}が
放免してやろう

…お主が身を
捧げるならな

ズキニミ

残された
唯一の肉親

助けたくは
ないか?

この鬼を
信用しても
いいの…?

でも

私の力では
父を助けることは
できない

それに
ここから出られても
いくところもない

それは
本当なんですね

鬼は人間のよう
に嘘はつかん

それなら—

私に
選択肢はない

——あなたに
救われた命です

トヤ

父を助けて
くださるのなら

あなたに捧げます

明日お主にも
確認させてやろう

明日には
お主の父は
元の生活に
戻る

可憐で
弱そうに見えて
その実胆が
据わった娘だ

え…？

やっぱり…騙された？

さて

それでは
いたたくと
しようか

ま…待ってください！
明日なんて…

食べられる私には
無理な話…

いったらもう
悪いようには
しないと

食べると
いうのは――

こういうことだ

!?

やめて……!

せつがん
接吻なんて
したら……!

案ずるな
これだけで
孕んだりはせん

ウフミ

赤子がぐんぐん
しまってます……!



そうだな…
これから
共に生きるのだ

痛い思いをさせて
お主に嫌われては
堪らん

こよい
今宵は

女の悦びを
教えてやろう



えっ?

唇を薄く開いて

!

おす…

力を抜け

う!?

Wッ

は

何これ体から
力が抜けてしまう

頭が
ぼうつとして

されるがまま

ぐわんぐわん

はっ

…ん

あー

ん

ん







捏ねて
つまんで

愛撫するものだ



なに
ニれえ、



体が…
かってに…動いて

へんな声が
でちゃう

ぐわ



切ない声が
漏れてきたな？

いいぞ
もつと聞かせろ



はう…
こんな…
はしたない…！

あゝ
あゝ

ぐわ
ぐわ

ぐわ
ぐわ

ぐわ
ぐわ

普段澄ました
お主の

欲に溺れた顔を
見ると
興奮するよ

それがいいのだ

小夜

ぐわ
ぐわ
ぐわ

どうして私の名前
知ってるの…?

ハハ







気をやったか

なにこれ
ドクドクして
降りてこれられない

これから毎晩
こうして
可愛がってやる

どうだ？
悪くないだろう

これから
ずっと――？

この甘い蜜
もっと
いただこうかな

や……！
ダメ今
触らないで……！
へんだから……！

駄目？
嘘はよくないな

1104

罰として

舐めやすいように
自分で開いて
もらおうか

!?

あ

...

な...で
体が勝手に...!?

いや...!
こわい...!

怖い?
それは嘘だろう

こんなに厭らしく
感じておいて

んぐ

んぐ







発行所 株式会社ぶんか社

〒102-8405

東京都千代田区一番町29-6

www.bunkasha.co.jp

※本作品はすべてフィクションです。実在の人物・事件・団体等には一切関係ありません。

※本書の内容あるいはデータを、全部・一部にかかわらず、無断で複製、転載、改竄、上演、放送および公衆送信（インターネット上への掲載を含む）することは、著作権法上の例外を除き禁じられています。また、個人的な使用を目的とする複製であっても、コピーガードなどの著作権保護技術を解除して行うことはできません。